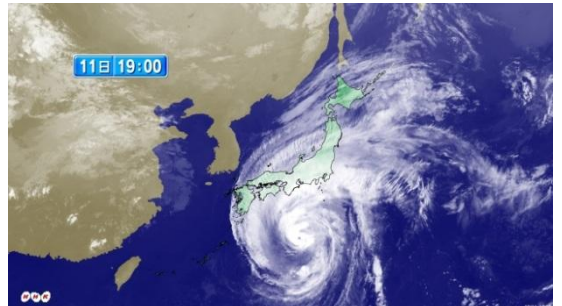


## ともに苦しまれる神

2019年10月12日、未曾有の大災害が日本を襲った。台風19号による大風・豪雨による自然災害である。頼みとする堤防が71河川128カ所で決壊。死者80名、行方不明者11名。浸水家屋4万5千棟以上(10/19 現在)。広範囲での土砂災害、断水、停電、通信障害が出たことは言うまでもない。生活のみならず、心にも大きな爪痕が残った。大切な家族、愛する人々との、あまりにも突然の死別である。この深い傷が癒えるまでに、いったいどれだけの年月が必要であらう。



今回のような大惨事が起きると、神への不信を新たにしている人がいる。確かに、幼子と老人、男女、正しい人と悪人の区別もなく、無差別に襲いかかる自然災害は、不条理そのものである。

「神はいるのか?」「神がいるなら、なぜこのような悲惨な出来事が起きるのか?」と。聖書の神に興味をもたなかった人も「にわか神学者」となり、神を攻撃する。

第一に、神は愛であるのだから、私たちに悪いことが起きないようにすべきである。

第二に、神は全能なのだから、わざわざ起こらないようにすべきである。

第三に、実際に悪いことが起きたのだから、神は愛ではないし、全能でもない。

しかし、その前提は正しいのだろうか。私たちは、少なくとも不条理に思える災害が起きるまでは、神の恵みを享受していたのではないだろうか。しかも、何十年も前に作られたハザードマップが示す危険地帯と、今回の被害地域は正確に重なっていたことがわかっている。人災という側面はないのだろうか。

けれども、何を語ろうが、災害は起きた。尊い人命は失われた。私たちは神の愛という聖書の教理を、今回の悲劇に対してどう適用したらいいのか。

ひとつのヒントがある。

イエスの友、ラザロが危篤であるとの報が入ったとき、イエスはあえてすぐに駆けつけず、四日後に到着したとき、すでにラザロは帰らぬ人となっていた。「もっと早く来ていただいていたら、弟は死ななかつたのに」と姉たちは嘆いた。イエスに注がれる村人の視線も厳しいものがあった。

その時である。イエスは大量の涙をポロポロと流されたのである。ご自分が誤解された悔しさではなく、本来、永遠に神と生きるべく造られた人間に襲いかかる破滅的な死の力とその背後にいる悪の存在に対する怒りの涙である。

大切な人を失った悲しみを共有されただけではない。キリストは、いぶかる村人たちを説き伏せ、墓場の岩戸を開けさせて叫ばれた。「ラザロよ、出てきなさい!」すると、死後四日もたっていたラザロが死装束をまとったまま出てきたのである。空前絶後の奇跡であった。

神は私たちとともに泣き、苦しんでくださる方である、と同時に、やがては死ぬべき私たちを永遠のいのちに活かす力のある御方であることをこの出来事は示している。

愛は感傷ではない。苦難の中を生き抜く力を与えるために、時には私たちの願う反対のことさえ起きる。神は全能であると同時に、人に自由意志と判断力を与えられたので、それを極限まで重んじてくださる。死や不幸はこれからも起こる。しかし、私たちにはともに涙し、私たちの罪を背負って十字架にかかるほどに私たちを愛して下さった神がついておられることを、聖書は繰り返し語るのだから。

